開催趣旨説明
井上　泰子（森林総合研究所国際連携・気候変動研究拠点主任研究員）

本日の国際セミナーの趣旨について説明させていただく。
（以下スライド併用）

まず、国際的な背景を簡単に振り返る。2005 年にモントリオールで開催された COP11[1]において、コスタリカとパプアニューギニアが、森林減少を食い止めることによる排出削減のメカニズムを構築し、これを気候変動緩和対策の次のメカニズムの一つとして位置付けることを提案したことにより、国際的な議論が始まった。

2007 年にインドネシアのバリで開催された COP13[2]で、森林減少・劣化の抑制を対象とする REDD だけではなく、プラスの部分、すなわち既に保存されている森林を維持する活動や、森林の蓄積を増大する、つまり植林等の努力も含むものとして、「バリ行動計画[3]」の指針においてその仕組みを検討していくことが決定された。

2010 年にカンクンで開催された COP16[4]では、REDD+の五つの対象活動や、七つのセーフガード、そして 3 段階のステップワイズアプローチなどについて決定された。

2013 年に行われた COP19[5]では、ワルシャワ REDD+枠組み[6]と総称される七つの合意文書の決定が行われ、2015 年に決定したパリ協定の 5 条に REDD+の実施と支援を行うことの重要性が位置付けられ、10 年にわたる交渉が集結した。

---

1 https://unfccc.int/process-and-meetings/conferences/past-conferences/montreal-climate-change-conference-december-2005/cop-11

2 https://unfccc.int/process-and-meetings/conferences/past-conferences/bali-climate-change-conference-december-2007/cop-13

3 https://unfccc.int/resource/docs/2007/cop13/eng/06a01.pdf

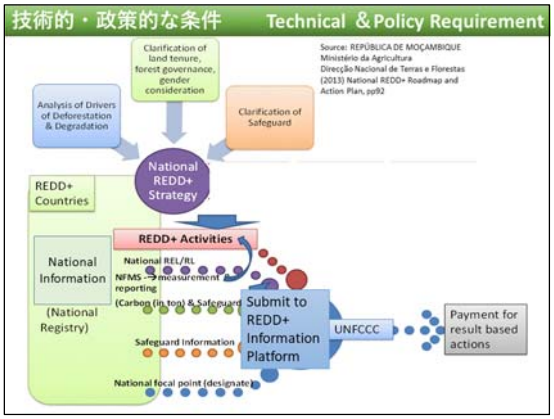
4 https://unfccc.int/process-and-meetings/conferences/past-conferences/cancun-climate-change-conference-november-2010/cop-16

5 https://unfccc.int/process-and-meetings/conferences/past-conferences/warsaw-climate-change-conference-november-2013/cop-19

6 https://unfccc.int/topics/land-use/resources/warsaw-framework-for-redd-plus

Opening Session

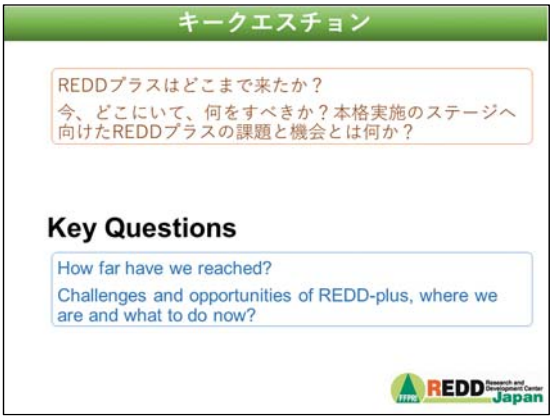
このパリ協定では、全ての国が協調し、気温上昇を産業革命前の 2℃以下のレベルに抑える、あるいはリスクに脆弱な国に配慮し、1.5℃以内に抑えることが目標として掲げられた。

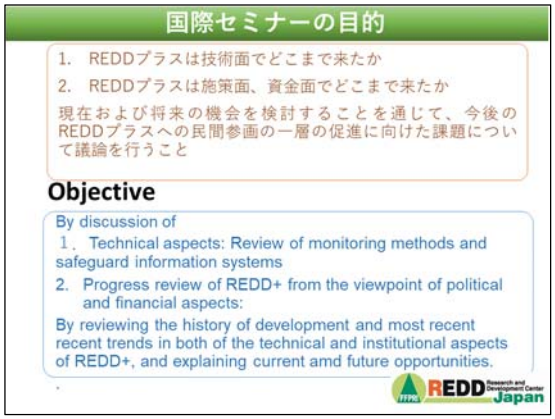


これらの決定において、REDD＋に取り組む各国は、まず国家戦略を策定すること、参照レベルを設定すること、セーフガード情報について報告すること、モニタリングシステムを設置し、その情報を報告すること、これらが成果に基づく支払いを受けるために必要とされている。

こうしたルールに基づき、気候変動に関する国際連合枠組条約（UNFCCC）における交渉と並行して、実施国と支援国の双方がさまざまな課題に取り組んできた。森林のモニタリング技術や、それをいかに低コストで、効率的・効果的に行うかといった技術開発が飛躍的に発展し、また、REDD+のセーフガードに取り組むことで、生態系、生物多様性、住民の福祉などが豊かになる取り組みの重要性が確認されてきた。

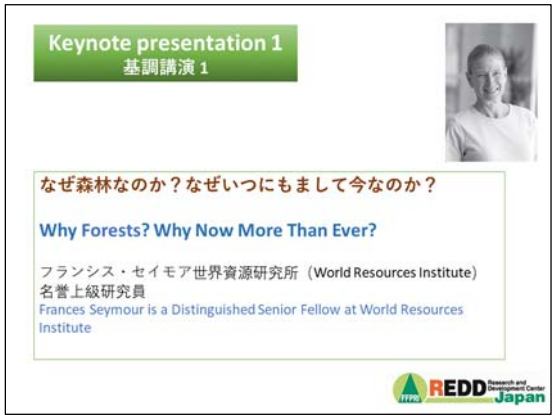
また、REDD+の体制整備のための準備や成果支払いに関するさまざまな資金源が活用されるようになってきた。このパリ協定の実施指針に合意し、2020 年から本格的な実施へのステップアップが期待される中、これらに対する情報を今、アップデートする必要が生じている。



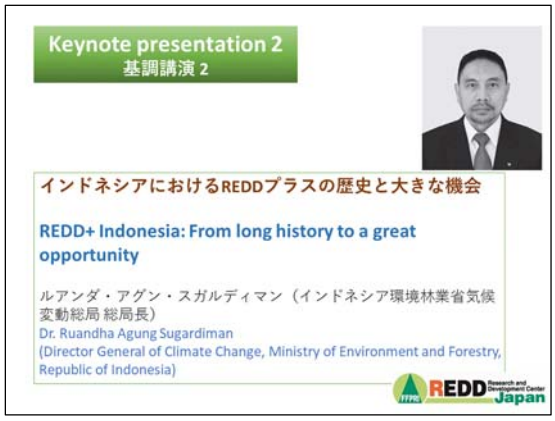


そこで今回の国際セミナーにおいては、REDD+はどこまで来たか、今どこに行って何をすべきか、本格実施のステージに向けた REDD+の課題と機会とは何か、専門家の皆さまをお招きして振り返る、ということをテーマに実施する。

このセミナーの目的は、モニタリング手法やセーフガードの取り組みといった技術的な最新動向と、施策面・資金面でどこまで来たかについて情報共有していただき、現在および未来の機会を検討することを通じ、今後の REDD+への民間参画の一層の促進に向けた課題について議論を行うこととしている。



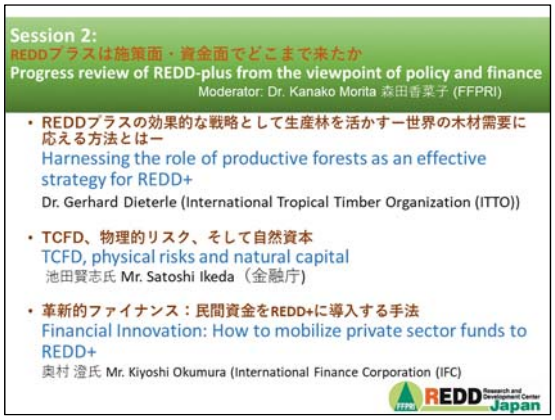
今回、2 人の素晴らしい専門家、実務者に基調講演をお願いしている。1 人目は世界資源研究所の Frances Seymour 名誉上席研究員で、「なぜ森林なのか？　なぜいつにもまして今なのか？」を演題にお話しいただく。



2 人目は、REDD+実施国のトップランナーの国の一つであるインドネシアから、環境森林省[7]気候変動総局長の Ruandha Agung Sugardiman 様に「インドネシアにおける REDD プラスの歴史と大きな機会」についてお話しいただく。

[7] http://www.menlhk.go.id/

Opening Session



続いて昼食を挟み、午後は二つのセッションとパネルディスカッションを予定している。セッション 1 では森林総研の佐藤がモデレーターとなり、「REDD プラスはモデリングやセーフガードに関する技術についてどこまで来たか」をテーマに、3 人の専門家にお話しいただく。1 人目は国連食糧農業機関[8]（FAO）の Marieke Sandker さんで、「UNFCCC へ提出済みの森林参照レベルと REDD+の成果」についてお話しいただく。2 人目はモザンビーク森林局から Joaquim Macuacua 様に、「モザンビークにおける森林モニタリング手法の発展と森林劣化の問題への取り組み」についてご講演いただく。最後にイギリスのスターリング大学[9]Annalisa Savaresi 様から、「REDD プラスの実施に向けて―セーフガードの意義―」についてお話しいただく。

セッション 2 では森林総研の森田がモデレーターを務め、「REDD プラスは施策面・資金面でどこまで来たか」に関し、3 人の専門家に情報提供していただく。1 人目は国際熱帯木材機関（ITTO）の Gerhard Dieterle 事務局長から「REDD プラスの効果的な戦略として生産林を活かす―世界の木造需要に応える方法とは―」について、続いて金融庁[10]の池田賢志様より「TCFD、物理的リスク、そして自然資本」、最後に世界銀行グループの国際金融公社[11]（IFC）の奥村様から「革新的ファイナンス：民間資金を REDD+に導入する方法」についてお話しいただく。

8 http://www.fao.org/home/en/
9 https://www.stir.ac.uk/
10 https://www.fsa.go.jp/
11 https://www.ifc.org/wps/wcm/connect/Multilingual_Ext_Content/IFC_External_Corporate_Site/IFC_Home_Japan/

そして、森林総研の江原が司会を務め、「本格実施のステージへ向けた REDD プラスの課題と機会」と題したパネルディスカッションを行う。最後に、森林総研 REDD 研究開発センターの平田ダイレクターが本日の総括を行う。

本日の終了時までに、REDD+の今の課題と機会についてアップデートしていただき、今、何に取り組むべきか、ご参加の皆さまが考えていただき、一緒に行動に移すきっかけとなれば幸いである。